

「桃と骨」

私は妹とふたりで暮らしている。妹の足は病がきっかけで動かなくなり、学校も辞めてしまった。私も郵便局員の仕事を辞めて、一日中妹と過ごすようになった。一日中布団の上で過ごす寝つきりの生活のなかで、妹は「死んだら鳥になりたい」と言い出す。ある夜、高熱にうなされる妹の願いを聞いた私は、かつて庭に埋めた小鳥の骨を掘り出し、桃とともに妹へ差し出す。翌朝、妹の背には羽が生えていた。

米の入った袋を背負って帰ると、妹は蚊取り線香の缶をくるくると両手で回して遊んでいた。布団の上でおむけになつて、缶に描かれた花と鶴の柄を、じつと見つめている。

「あぶないから触らないでよ」

「姉ね、おなかすいた」

「いま桃むくから、まつてて」

ちいさな土間の隅に置いた籠のなかから、桃をひとつ取ると、流しで洗いながら産毛を落していく。包丁で深く切り込みを入れ、ぐるりと回してからぱかんと開いて種を取り。爪の先をつかって皮を剥く。ふたつの半球を、切らずにそのまま妹のところへ持っていく。前までは八等分して皿に乗せ、フォークで食べさせていたが、いまでは大きな塊を、そのまま素手で掴んで食べるのが普通になってしまった。妹はあらゆる食器を使うのが下手で、どんなものでも素手で掴んで食べててしまう。おかげで彼女の布団には幾つもの汚れができる。

果汁にまみれてつやつやと輝く桃の、半分を妹に渡す。妹はおむけのまま、大きな

半球に齧りついている。私は窓を開けてから妹のそばに座り、桃を齧り始めた。湿った風が部屋を満たしていく。汗で額に張り付いた前髪をぬぐいながら、その手にべつたりと桃の汁がついてべたべたとするのを嫌だと思う。

「姉ねが米もらいに行つてる間にな、鳥が来た。いつもの鳥、大きくて灰色のが一羽。

それで、猫も来た。黒いのが。だから鳥はすぐ逃げた。でも猫も鳥にびっくりしてた。

猫もさっさと逃げてつた。おかしいなあ、猫が鳥にびっくりしてんのだもん」

妹は桃を食いながら喋り、桃を食いながら笑うので、器用だと思う。わたしはそうか、と言いながら、桃を齧る。網戸のむこうの庭を見つめながら、私が見逃した猫について想像する。桃を食べ終わつた妹は手のひらを丁寧に舐めながら、桃を一滴のこらず堪能している。

いつからか、妹の脚は全く動かなくなつてしまつた。まず右足から、そのあとで左足が動かなくなつた。学校に通えなくなつて、それ以来布団の上で横になつて暮らしていく。足が動かなくなれば次は手か、と心配していたが、そんなこともないようで、妹はまいにち手をばたばたと動かしながら布団の上で蜜柑をむき、漫画を読み、気に入つた漫画の絵をノートに写したりしている。肩を中心として、手の先で軌道を描く円周上には、雑誌やお菓子、色鉛筆やティッシュ箱が積み上げられていて、それは砦のように妹の布団を囲つていた。

窓から身を乗り出して、曇つた空をじっと見ていると、ぐいと、シャツの裾を引っ張

られた。

「トイレ？」

「うん」

妹はもちろん、一人でトイレに行けない。私が妹を担いで、妹の部屋からすぐの所にあるトイレに連れていき、便座に座らせる。私は一度トイレの外へ出て、「もういいよ」と、まるで隠れんぼの鬼のように妹に呼ばれるのを待つ。これを一日に五回くらいやる。

手を洗わせてから、また布団に連れていく。

妹のトイレが済むと、私は土間の縁にすわり、髪を束ねなおし、段ボールいっぱいに詰まつた大蒜を剥きはじめた。妹の為、郵便局の窓口の仕事をやめてからは、こんな風に家でできる小さな仕事をして何とか生計を立てている。大蒜の皮剥きは大磯のばあさんから貰つた仕事で、何箱か剥く代わりにお米や野菜を分けてもらっている。春には大蒜ではなく、梅のヘタを取つたりもする。妹が手伝う日もあるが、今日は眠くやる気が出ないようなので、一人で皮を剥き続けている。乾いた厚い皮を剥くと現れる、薄くて紫がかつた膜がきれいだ。

小さな古いラジオから、ノイズまみれの天気予報が流れている。やっぱり明日は雨が降るみたいだ。天気予報が終わるとラジオの声はぱっと明るくなり、はがきでも読み上げたんだろうか、何か言つた後で曲が流れ始めた。

たつたらつたつたらつたつたらつた。へらへらとした管楽器の音のあとで、女

の声が聞こえる。音質がよくないのでよくわからないが、日本語ではないようだ。英語かと思つて耳を傾けてみるが、もしかしたら英語でもないのかもしれない。彼女はひとつひとつの音をびやっと唾でも飛びそうなほどに、強く発音している。怒つてゐみたいに聞こえるし、笑つてゐる様にも聞こえる。日本語しか知らない私には、馴染みのない音がたくさんあって、なんとなく耳を傾けるだけでも楽しい。歌にあわせて大蒜の皮に爪を立ててめくつてると、後ろから歌声がきこえた。振り向くと、向こう側で妹がにやにやしながらこちらを見ながら歌つていた。

「この歌しってんの」

「しつてるよ。最近よく流れてんのだもん。ずっと、一日中ラジオ聞いてるから覚えた。」

「これ、英語じやないよね」

「英語じやないね。英語じやない、英語っぽいけど違う言葉だ。なんだろうね。でも覚えた。意味もわかんないのに。意味もわかんないのに歌えるわ」

妹はあはははは、とひとしきり笑つた後、また歌い始めた。私は段ボールから大蒜をもう一つ取り出し、ふたたび剥き始めた。

やがて曲は終わり、妹の声はいつのまにか止まっていた。もう何個の大蒜を剥いたのかがわからないように、妹が黙つてからどれくらい経つたのかもわからない。沈黙は数分だけ続いているよりも、何時間も続いているようにも思える。ぱつ、と振りかえ

り、妹のほうを見ると、横たわったまま、窓のほうを見つめている。

段ボールを埋め尽くしていた大蒜は、あと一つしか残っていなかつた。剥き終えてつるつるの大蒜を袋に入れて、最後のにんにくを剥こうと箱に手を入れると、妹が私に喋りかけてきた。

「なあ」

「なに」

「姉ねは、死んだらなんの動物になりたい」

「またその話。やめてよ。縁起でもない」

「でもなあ、あたしずつと考へてるよ。最近、ずっと。寝てばっかりで頭おかしくなつたからかな。それとも本当に死ぬからなのかな」

「あー。もう。やめて。本当に」

「死ぬ前に動物の骨を呑みこんどくと、その動物になれんのでしょ」

「そんなの、どこで習つた」

「しつてるよ。昔から。本でも読んだし、大磯のばあばも言つてたでしょ。魚の骨食べてから死んだら魚になるし、鶏の骨食べてから死ねば鶏になるのでしょ。私はなんになろうかな」

「あんたにはまだ早いわ。そんなこと考へる暇あつたら、剥くの手伝つてよ」

「あたしなんになろうかなあ。でつかいのがいいな。象とか。でも象の骨つて食べれ

んのかな。象の骨のみこもうとして喉がつまつて死んで、そしたら象になれるのかなあ。

胃に入つてからじやないと象にはなれないのかなあ」

「やめて」

「恐竜もいいか。恐竜の骨たべれば恐竜になれるのか。恐竜の骨つてどこで売つてんだろうなあ」

「やめて」

「鯨でもいいな。でも泳いだことないから怖いな。鯨はなしだな。でも鯨は大きいからなあ。鯨がやっぱいいのかもな」

「やめて」

怒鳴るように大きな声を出すと、ついに妹は黙つた。しばらく黙つてから、はーい、と小さな声で返事をしてから、黙つた。にぎりしめた、最後のひとつの大蔥を見つめたまま、なぜか剥げずにいた。

「昔さー、鳥飼つてたよね、飼つてたというか、二日で死んだけど」

足の爪を切りながら、天井を見上げて、記憶の紐をすーっと辿つてみる。いた。いた
かもしれない。小さな黄色い鳥。

「いたね。そういえば」

「お祭りで買ったんだよね」

「あれ？ 誰かから貰つたんじゃなかつた？」

「いや、お祭りの屋台で売つてて買つたよ、姉ねはー、黄色じゃなくて青いのがいい
つて言つてたけど、あたしが泣いて暴れたら、黄色になつたんだよ」

「よく覚えてるね」

「姉ねは、鳥が死んだとき、ぎやーって、泣いてた。顔真っ赤になるまで泣いて、次
の日も泣いてた」

そんなことがあつたか。私はほとんど覚えていなかつた。あんなに可愛がつていたと
いうのに、あんなに泣いたというのに、私はほとんど覚えていない。もう忘れてしまつ
た。

「死んじやつた鳥、どうしたんだっけ」

「埋めた。庭に。埋めたよ。ふたりで。泣きながら。雪柳のそばを掘つて、深いとこ

るまで」

剥き終わった大蒜を、大磯のばあさんに届けにいく。自転車の後ろに段ボールを括り付けて、濡れた道をざーっと走っていく。遠くの杉の林の向こうには、発電所の塔が見える。いちめんの田んぼの稲はすっかり伸びて、風が吹くたびに波打って揺れる。先に張り付いた水滴がさらさらと震えて、きらきらと光る。

緩い坂を登りきると、青い瓦屋根が見えてくる。ちいさな生垣の前に自転車を止めて、箱を抱えて家に入る。ばあさん、と呼んでみるが、部屋は暗く返事はない。やがて後ろから、ぬつ、とばあさんが現れた。暑いなあ暑いなあと言いながら泥のついた手袋を脱いでいる。

「届けに来たよ」

「あつ。そこ置いとけ。まーはやいこと。はやいなあ。はやいよ」

ばあさんは箱をもつて台所のほうへ消えていく。そういえば、テレビの音が聞こえない。午後にこの家に来れば、じいさんがテレビを流しながら昼寝しているはずなのに。

「今日は、じいさんいないの」

台所のばあさんの背中に問いかけてみる。

「あー、じいさんか、じいさんは、死んだっぺ。あー、知らなかつたか。四日も前よ。じいさんは、肺炎だつて言われたけどありや老衰だな。老衰で、死んだわ」

ばあさんは大蒜を桶にぶちまけ、そこに水を汲みながら淡々としゃべる。

「じいさんはなあ、もう人には生まれたくないっていうもんでよ、だから、夜な、もう死にかけてるときに、口の中に印鑑いれたのよ。印鑑。はんこな。はんこは象牙でできてつからよ、んまあ骨とは違うけど、そんでも骨みたいなもんだから。口ん中あけさせて、中に印鑑入れたのよ。そしたら、次の朝起きたら庭にでつかい象がいるわけだ。ああよかつたわ。ちゃんとじいさん象になれたんだなってすぐわかつた。したら畠から茄子とか取ってきて、じいさんにあげたら鼻使つて器用に食うのよ。たらふく野菜とか果物とか食つて、そしたらのつそのつそ出ていったわ。象だからよ、西に行つたんだな。西の山のほうに行つたわ」

ばあさんは土間に置いてあつた、蓋の赤い漬け瓶をもちあげると、笑いながら私に渡してきた。

「じいさんがいないから、梅干し、食べ切れねえのよ。これ、もつてけ」

妹が嫌いだった。うるさくて、だから放っておいてみた。するとひとりで勝手に育つていった。いつのまにか文字を覚えた。九九も覚えていた。側転をしながら家を縦断するようになった。うるさいけど、なんだ、放つておいても一人で育つていけるのか、と思つた。母さんも父さんも、いつのまにかどつかに消えてしまったが、特になんにもなく、ふたりで暮らしていけた。

私と違つて学校が好きだつた。毎日休むことなく学校に通い、持ち帰つた教科書を広げては、げらげら笑つていた。なにがそんなに面白いのかと聞けば、文字があつて色があるからだと言われた。全くわからない。わからないけど、ああ、こいつはこのまま大人になつて、したたかに生きていくんだろうな、と思つた。

それが、何年か前の冬、郵便局から帰つてくると、妹が廊下で倒れていた。おでこから血を出して倒れたまま、おかえり、と言われた。右足がなし、震えんの。そして、転んで、ぶつけて、こうなつた。タオルで頭をぐるぐる巻いて止血して、診療所に連れて行つた。おでこと足を診てもらつたが、おでこはすぐに治ると言われ、足に關してはここで判らないと言われた。紹介状をもらって大きな病院に行つたら、もうどうしようもないと言われた。このまま左足も動かなくなるでしょう、と言われて、妹はそんなまさかと笑いながら、左足をぶんぶん振り上げていたが、それからしばらくすると本当に

動かせなくなってしまった。さいしょの頃は壁を辿つていけば一人でも歩いて行けたが、やがてそれも難しくなった。私は郵便局を辞めた。一日中妹と家にいることにした。

学校に行けなくなつた妹に、沢山本を買ってやつた。漫画に雑誌、時間の潰せそうなものをなんでも買い与えた。あるとき、私がラジオを聴いているのを見て、私も欲しいと言つてきた。私は自転車を漕いで街まで出ると、電気屋でラジオを買った。赤い小さいラジオだつた。冷たい風で凍つてひりひりと痛む鼻先を押さえながら、妹にラジオをあげた。妹は喜んでいた。が、すぐに「黄色いのがよかつた」などとほざき始めたので、おでこに手刀を食らわせた。

夜中ふと目が覚めて、妹の部屋の前を通つたりすると、微妙にラジオの音が聞こえてくる。ぼそぼそとした声に交じつて、くつ、くつ、と静かに笑う妹の声が聞こえる。今夜もそうだった。わたしは襖の前でしゃがみこんで、ラジオを聴く妹の笑い声をそつと聞いていた。何分も経つてから、襖の向こうから喋りかけられた。

「そこに居んでしょう」

妹は手を伸ばして襖を開けてきて、私を見るなりにつ、と笑つた。

「いつから気づいてた」

「ずっと。ずっとね、ねえ、姉ね」

「何、トイレ？」

「ちがうの。ちがくて、変なんだけどさあ、そこにしばらく座つてほしいの」

「どうして」

「いいから、なんにもしなくていいから、とりあえず、座つてて」

私は襖をしめて、妹の布団のそばに座った。常夜灯のオレンジの光が、畳に、カーテンに、妹の頬に影を生んでいる。

……あのね、あたし、最近、眠れない。最近っていうか、ずっと、眠るのが、怖い。眠るのっていうか、もしかしたら、生きるのが怖いのかもなあ。ずっと、こうやって一日中、布団のなかで横になつてると、気がほんとうに、狂つてくるとおもう。こうやって、寝たり、漫画読んだりしてると、勝手に体が大きくなつてくる、わかるんだよ。手が足がどんどん長くなつてくる。あたしの知らないところで、それが何よりも、怖い。

あたし、途中で学校行くのやめたから、全部中途半端なんだよ。手足だけ伸びてって、言葉だつて、ラジオとかさあ、漫画とかで覚えてるから、ね、変なんだよ。変でしょ。姉ね以外に話さないから、話す相手いないから、なんか、どんどん喋るの下手になつてるんだよ。それも、怖い。怖いね。

朝から雨が降っていた。妹は頭が痛いと言つて、昼になつても眠つていた。頭まで布団をかぶり、うずくまつているのを見ると、人というよりも何かのサナギのようだと思う。

机にもたれて、屋根にぶつかっては砕けていく雨の音を聞いていた。強くなつて、弱くなつて、弱くなつて、強くなる。ラジオのアンテナを意味もなく伸ばしては、人差し指ですつと押して縮めていた。

だん、だんと畳を叩く音が聞こえて目が覚めた。ゆっくり体をのばしながら立ち上がり、ふくらはぎは畳の目にあわせて細かく凹んでいた。襖を開けると妹が、首まで布団をかけたまま、私のことを見つめていた。

「トイレ？」

「ちがう。まだいい」

「どうした」

「おなか、すいた」

「じゃあ桃剥くから」

「桃じやない。桃じやないのがいい」

「なにが食べたい」

「……葉っぱ」

「葉っぱ？」

「緑の、葉っぱなら、なんでもいい。なんでもいいから、葉っぱが食べたい」

「葉っぱ」

「そう、葉っぱ」

私はサンダルをつっかけて外に出た。雨はまだ降ってたけど、かなり弱まっていたので傘を持つて行かなかつた。家の裏にまわり、崩れかかった低い石垣をのぼり、上の、もう使われていない畠まで行つた。端のほうにびっしりと生えている紫蘇を何枚かちぎり、また石垣を下る。斜面は雨で濡れて、今にも滑り落ちそうで怖い。家の正面のほうへ回り、中に入ろうとすると、目の前で鳥がものすごい勢いで飛んで行つた。庭にいたのか、と思い庭のほうを見ると、布団にくるまつた妹のさなぎが地面に落ちていた。私は妹のほうへ急いで駆け寄つた。

「なにしてんの！」

「鳥が、鳥が来てた。灰色のな、あの、いつも来てる大きい鳥が、濡れてて、じつとあたしのほう見るから、あたし、触れないかなつて思つて、窓から。それで、気ついたら、落っこちてたなあ」

妹を布団ごと抱える。布団は雨水を吸つて重い。布団から飛び出した二本の足は、今にも折れそなほど細くなつていて、妹を畳の上にのせて、布団から出すと風呂場に連

れて行つた。

「今日は風呂の日じゃないでしょ」

「ばか。黙つてて」

お湯をためて、服を脱がせた妹をそこに入れた。妹はぶかぶかと体を浮かせている。妹を風呂から出し、体を拭き、今朝洗つた綿のシャツを着せた。妹が出ていった風呂の中に、今度は布団を入れた。布団はお湯を吸つて風呂桶を満たし、足で踏むたびに土の汚れを吐き出した。

夕飯を食べ終えて、茶碗を水につけておいた。茶碗のなかの梅干しの種が、水中を漂つてかすかな音をたてている。夜になると、耳がさえてくる。蛍光灯の放つ唸り声、田んぼから聞こえてくる蛙の声。まだ雨は降っている。それに交じつて、妹の部屋から小さな声が聞こえた。

そつと襖を開けると、妹は布団にくるまっていた。顔を覗き込むと、赤い。時々、うなされたように微かに声をあげる。

「どうした」

「さむい、さむくて、頭が痛い」

妹の額に手をあてる。かなり熱い。

「熱ある」

「そうか、そうか、熱が出てるか、あたしは、熱が出てるか」

妹は目をぐらんと回して、目を閉じる。息が荒く、吸い込む音も吐き出す音もはつきりと聞こえる。それはどんどんと速くなっているようだ。

「薬もつてくる」そう言つて立ち上がりうとすると、妹にがつと腕を掴まれた。白く、細く、力強い両手で。

「姉ね」

「なに」

「姉ね」

「なによ」

「あのな、あのさ、前、死んだらなんになりたいか話したでしょ」

「またその話、いいから、黙つて寝てな。薬もつてきてあげるから」

「聞いて、聞いて、聞いて」

「なに、大丈夫、聞いてるよ」

「あのな、あたし、もうだめな気がすんの」

「大丈夫だって、寝てたら、治るよ」

「ううん、ちがう、ちがうの、今日だけは違うの、なんとなく、わかるの」

「ちょっと、やめてよ」

「それで、それで考えてたんだけど」

「なに、ねえ、やめてよ」

「おねがい、おねがいおねがいおねがい、聞いてほしいの。あたし、ずっと、死んだら大きい動物になりたいと思ってたの。このまえ姉ね言つてたでしょ、大磯のじいじが、象になつたって言つてたでしょ、あたしも象になりたいと思つた。でもね、でも今は、大きくなくていいって思うの。小さくていいなつて、思う。どんなのでもいい。大きくても、小さくとも、自分だけの力で好きなところにいけたら、それでいいと思うから。あたし、好きなところ行きたい。自分で、好きなところ行きたい」

二つの丸い目が、私をじっと覗き込んでいる。いま、妹の目は、どんな光でも吸い込んでしまったうなほど、深い色をしている。そのなかに、私がうつって、ふるえている。

「姉ね」

「なに」

「桃、たべたい」

私は立ち上がり、襖を閉めて、裸足で外へ出た。私はとっくに花の枯れた雪柳のそばへ行き、手で土を掘り起こした。背中に幾つもの雨粒がおちて、シャツが肌に張り付いていく。土は柔らかく、手で搔くたびに水が出て、泥がまとわりつく。何十分もかけて辺りを掘り起こしていると、ようやく小さな、白い、骨を見つけた。真っ黒な泥の中に沈んでいた。そつと掴んで丁寧にぬぐつた。濡れたまま家にはいり、水道でよく洗つた。

骨の溝から、私の指の爪の隙間から、泥があふれて溶けていく。骨と一緒に桃も洗つた。

半分に切つて、ねじつて、種を取つて、剥いて、妹のところへ持つて行つた。襖を開け
ると、ぼーっと眠つていた妹がそつと目を開くと、小さな声で

「びしょ濡れだ、なんで、なんで姉ねは、びしょ濡れなの」と笑つた。私は妹に桃を差
し出した。妹は両手を震わせながらそれを受け取つた。その、桃の半球のやわらかい表
面に、私は細い骨を突き刺した。

「なに、これ」

「鳥の骨。小さいけど、ちゃんと鳥の骨」

次の日、目が覚めると妹は鳥になつていた。正確に言えば、少しだけ鳥になつた。妹
の背中には羽が生えていた。妹は生えたばかりの新しい羽をばさばさと動かしては、け
らけらと笑つている。おでこを触つてみれば、熱はとつくなつたみたいだつた。
もしかしたら飛んで、一人で動けるようになるかもしれない、妹はばつさばつさと
羽を揺らしていたが、一向に飛びそうにはなかつた。それでも妹ははしゃいで、布団の
上で身をよじつては笑つていた。